

三樹会病院における臨床統計
—最近5年間の外来新患統計 (1994~1998年度)—

医療法人 (社団) 三樹会病院 (院長 : 丹田 均)
丹田 均, 加藤 修爾, 大西 茂樹, 中嶋 久雄
南部 明民, 新田 俊一, 小六 幹夫, 赤桎 圭吾

CLINICAL STATISTICS AT THE UROLOGICAL
CLINIC OF SANJUKAI HOSPITAL
—STATISTICS ON NEW OUTPATIENTS
OVER THE LAST FIVE YEARS—

Hitoshi TANDA, Shuji KATO, Shigeki OHNISHI, Hisao NAKAJIMA,
Akihito NANBU, Toshikazu NITTA, Mikio KOROKU and Keigo AKAGASHI
From the Urological Clinic of Sanjukai Hospital

We herein report the clinical statistics on new outpatients over five years from 1994 at our hospital. The average number of new outpatients per year was 8,534.4 (8,366–8,658) and there was only a slight variation in the number over the last five years. The male to female ratio was 1.61 : 1. Twenty-one percent of the outpatients were referred to us by other sources. The representative operations on outpatients were circumcision, vasectomy, resection of condylomas and resection of caruncles. A statistical study was made on new outpatients according to the international classification of disease. There were 197.0 (2.3%) malignant urogenital tumors per year. There was a tendency for sexually transmitted diseases to increase over the last five years. In males, the major diseases were upper urinary tract stones (23–27%), benign prostatic hypertrophy (19–26%) and prostatitis (15–24%). In females, they were cystitis (57–59%), upper urinary tract stones (17–18%) and neurogenic bladder (3–4%). We conclude that our hospital plays a major role as a private urological hospital.

(Acta Urol. Jpn. 45 : 863–872, 1999)

Key words : Clinical statistics, Outpatient clinic

緒 言 対 象 と 方 法

1994年より1998年の5カ年間の医療法人 (社団) 三樹会病院 (札幌市, 日本泌尿器科学会専門教育施設認定, ESWL 施設認定) の外来新来患者 (以下新患と略す) の臨床統計を行ったので報告する. 医師常勤数 (非常勤医師2名) は, 1998年10月現在, 8名である. また, 1998年11月1日で開院以来満20年を迎えた.

1994年1月1日より, 1998年12月末日までの5カ年間に当院に受診した新患を対象とした. そして1カ年毎に統計を行った.

疾病分類は, 過去のわれわれの報告¹⁻¹⁰⁾の如くWHOに定められた国際疾病分類の第9回修正分類表を採用した.

Table 1. 外来新患者数

(1994年~1998年)

	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	計 (年平均)
男 性	5,196 (60.0%)	5,245 (60.9%)	5,236 (61.1%)	5,333 (62.9%)	5,317 (63.6%)	26,327 (5,265.4) (61.7%)
女 性	3,462 (40.0%)	3,365 (39.1%)	3,327 (38.9%)	3,147 (37.1%)	3,049 (36.4%)	16,350 (3,270.0) (38.3%)
合 計	8,658 (100.0%)	8,610 (100.0%)	8,563 (100.0%)	8,480 (100.0%)	8,366 (100.0%)	42,677 (8,535.4) (100.0%)
(紹介患者数)	1,969 (22.7%)	1,843 (21.4%)	1,855 (21.7%)	1,674 (19.7%)	1,613 (19.3%)	8,954 (1,790.8) (21.0%)

結 果 と 考 察

1. 外来新患数

1984年より1998年の5カ年間42,677名, 年平均

8,535.4名であった. 男性年平均5,265.4名, 女性3,270名であって, 男女比は1.61:1であった. 他医より紹介を受けた患者はこの5年間で8,954名, 年平均1,790.8名21.0%であった (Table 1).

Table 2. 外来新患の内訳

(1994年~1998年)

	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	計 (年平均) (100%)
確 診	7,599	7,610	7,647	7,597	7,555	38,008 (7,601.6) (89.1%)
未 診	872	824	757	788	746	3,987 (797.4) (9.3%)
正 常	132	135	130	53	37	487 (97.4) (1.1%)
他 科	55	41	29	42	28	195 (39.0) (0.5%)
合 計	8,658	8,610	8,563	8,480	8,366	42,677 (8,635.4) (100.0%)

Table 3. 主なる外来手術数

(1994年~1998年)

	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	合 計
環状切開 (背面切開)	31 (1)	33	30	31	22 (2)	147 (3)
精管結紮	10	15	9	8	5	47
コンジローマ切除	9	10	15	15	24	73
カルンケル切除	12	13	10	18	23	76
睾丸生検	7	5	5	3	3	23
ESWL (男:女)	3 (2:1)	4 (4:0)	21 (21:0)	23 (16:7)	26 (20:6)	77
UROWAVE	—	—	1	83	19	103

Table 4. I 感染症および寄生虫症

(1994年~1998年)

	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
016 泌尿生殖系の結核						
016.0 腎	1	2	5	4	0	12 (2.4)
(経過)	(10)	(9)	(5)	(7)	(4)	(35) (7.0)
漆食腎	(—)	3	(—)	(—)	1	4 (0.8)
096 梅 毒	2	2	5	5	3	17 (3.4)
(経過)	(2)	(—)	(—)	(—)	(—)	(2) (0.4)
098 淋菌感染						
098.0 急性, 下部泌尿生殖器	56	79	133	178	181	627 (125.4)
クラミジア混合	9	15	10	11	45	90 (18.0)
099 その他の性病	154	154	162	232	285	1,009 (201.8)
099.4 その他の非淋菌性尿道炎	4	4	3	3	8	19 (3.8)
(076) ヘルペス	27	47	75	66	50	265 (53.0)
(078) クラミジア	93	109	109	125	145	581 (116.0)
(112) カンジダ症	1	1	2	1	1	6 (1.2)
(132.2) 毛じらみ症	2	8	16	15	27	68 (13.6)
616.1 外陰部炎	26	14	18	22	13	93 (18.6)
外陰部湿疹	65	79	63	75	57	339 (67.8)
トリコモナス	1	—	1	—	—	2 (0.4)
軟性下疳	26	9	13	15	17	80 (16.0)
<性病の検査→URO OK>	—	—	—	—	1	1 (0.2)

2. 外来新患の年齢別, 性別受診数

新患の年齢別受診数に関しては, 20~30歳代と60~70歳代にピークを示す山型の受診数の型であったが, 20~30歳代のピークより60~70歳代のピークの方が受診数が多かった. この傾向は, 1988年からであるが⁹⁾, それ以前をみると1978年開業から1984年までは, 20~30歳代にピーク^{1~3)}に, その後1987年代で20~30歳代と60歳代にピークの山型を示していた⁸⁾.

性別受診に関して, 男子では以前は30歳代がピークであったが, 最近5年間は30代40代50代と略同数で, むしろ60代にピークがあるようである. 一方女子では, 以前は50歳代がピークであったが, 最近5年間も同様で, もう一つのピークは20歳代にもあり, 二相性を示した.

20歳代は膀胱炎などの炎症を中心に, 50歳代は結石, 尿道膀胱群, そして血尿の精査のため受診した結

果と考えている.

3. 外来新患の内訳

その年間に確実に診断 (以下確診とする) した患者の割合 (5年間の平均) は97.9%, 検査がその年間で途中のため, まだ診断しえない患者 (以下未診とする) は0.5%, 初診時泌尿器科的主訴があり, 精密検査の結果正常であった患者 (以下正常とする) は1.1%, 初診時泌尿器科疾患でなかった患者 (以下他科とする) の割合は0.5%であった. この傾向は最近5~6年間は略同様の結果であった (Table 2). 開業当初は, 他科が7.0%, 正常が4.6%であったが^{1,2)}, 年々その割合は減少しているので, ようやく, 泌尿器科専門病院として認知された感がある.

入院患者は最近5年間は年平均2,081.2例であり, 手術件数は年平均1,288.2例, ESWL 施行は年平均487.8例であった. 死亡件数は5年間で62例, 年平均

Table 5. II 新生物 (悪性)
 (1994年~1998年)

	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
185 前立腺癌	66	60	83	103	105	417 (83.4)
(経過せる)	(2)	(4)	(4)	(2)	(8)	(20) (4.0)
186 精巣腫瘍	11	8	8	4	7	38 (7.6)
(経過せる)	(6)	(9)	(9)	(13)	(11)	(48) (9.6)
187 陰茎その他の男性生殖器	3	0	1	2	0	6 (1.2)
188 膀胱腫瘍	70	69	73	63	57	332 (66.4)
(経過せる)	(28)	(46)	(39)	(49)	(37)	(199) (39.8)
(再発)	(5)	(3)	(4)	(8)	(9)	(29) (5.8)
188.4 膀胱後部腫瘍	0	0	2	1	1	4 (0.8)
189.0 腎 癌	18	17	18	20	24	97 (19.4)
(経過せる)	(19)	(33)	(26)	(38)	(35)	(151) (30.2)
(疑い)	(16)	(25)	(19)	(25)	(20)	(105) (21.0)
189.1 腎盂・尿管腫瘍	12	12	14	13	11	62 (12.4)
(経過せる)	(4)	(3)	(3)	(4)	(2)	(16) (3.2)
194.0 副腎腫瘍	7	4	6	2	2	21 (4.2)
158.0, 196.2 後腹膜腔腫瘍	1	1	2	1	—	5 (1.0)
182 子宮癌 (尿路侵襲)	3	3	4	3	3	16 (3.2)
卵巣癌 (尿路侵襲)	2	—	—	—	—	2 (0.4)
154.0 胃腸系癌の尿路侵襲	8	7	7	7	10	39 (7.8)

Table 6. II 新生物 (良性)
 (1994年~1998年)

	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
078.1 外陰部コンジローマ	11	12	17	15	28	83 (16.6)
599.3 尿道カルンケル	23	26	25	30	30	134 (26.8)
尿道ポリープ	4	7	3	1	4	19 (3.8)
222.4 陰囊腫瘍	6	2	2	4	5	19 (3.8)
222.1 陰茎良性腫瘍	5	4	1	3	1	14 (2.8)
223.0 腎腫瘍 (良性)	—	—	1	1	1	3 (0.6)
尿管ポリープ	—	—	1	—	—	1 (0.2)
223.8 尿道腫瘍	—	3	1	2	3	9 (1.8)

12.4例であった。

4. 外来患者手術

外来扱いの手術数とその内訳を Table 3 に示した。

従来通りで環状切開, vasectomy, condyloma 切除, caruncle 切除が主なるものであった。1994年より日帰りで ESWL を施行し, また, 1996年より前立腺肥

Table 7. Ⅲ 内分泌, 栄養および代謝ならびに免疫障害

(1994年~1998年)

	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
257 精巣機能障害						
(606) 無精子症	5	5	5	4	6	25 (5.0)
(606) 欠精子症	18	13	14	17	13	75 (15.0)
(758.7) XXY 症例	3	3	3	3	3	15 (3.0)
(経過)	(2)	(0)	—	—	—	(2) (0.4)
(792.2) 不妊の疑い	0	5	3	23	23	54 (10.8)
死精子症	1	4	2	0	1	8 (1.6)
(608.8) 血精液症	44	42	30	33	36	185 (37.0)
逆行性射精	1	—	1	1	1	4 (0.8)
Male vagina	1	—	—	—	—	1 (0.2)
257.2 類宦官症	2	2	1	1	2	8 (1.6)
259.0 晩発思春期	1	1	0	1	1	4 (0.8)
302 勃起障害 (ED)	44	63	90	78	89	364 (72.8)
持続勃起症	—	2	1	—	—	3 (0.6)
274 高尿酸血症 (痛風)	33	24	22	22	11	112 (22.4)
高プロラクチン	—	—	—	—	2	2 (0.4)
307.6 夜尿症	28	28	22	32	18	128 (25.6)
252.0 副甲状腺機能亢進症	—	2	—	—	—	2 (0.4)
270.0 チスチン尿症	5	3	2	4	2	16 (3.2)
(チスチン結石)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(1) (0.2)

Table 8(1). X 泌尿生殖系の疾患

(1994年~1998年)

	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
580 急性糸球体腎炎	7	5	6	2	7	27 (5.4)
581 ネフローゼ症候群	2	2	9	7	7	27 (5.4)
582 慢性糸球体腎炎	22	39	48	39	37	185 (37.0)
583 糖尿病性腎炎	4	2	4	7	3	20 (4.0)
584 急性腎不全	7	10	16	6	3	42 (8.4)
585 慢性腎不全 (尿毒症)	37	36	28	47	34	182 (36.4)
腎周囲炎	2	2	1	0	1	6 (1.2)
589 腎の萎縮	19	25	20	22	19	105 (21.0)
無機能腎	10	12	8	6	6	42 (8.4)
590.0 腎盂腎炎	114	87	102	83	83	469 (93.8)
591 水腎症	78	71	90	86	75	400 (80.0)
(経過)	(3)	(—)	(2)	(0)	(0)	(5) (1.0)
(術後)	(13)	(16)	(14)	(11)	(5)	(59) (11.8)
593 腎および尿管その他の障害						
593.0 腎下垂	73	84	67	43	52	319 (63.8)
593.7 VUR (両側)	8	11 (1)	7 (2)	2 (1)	8 (2)	36 (6) (7.2) (1.2)
(経過せる)	(7)	(6)	(3)	(2)	(4)	(22) (4.4)
593.2 腎嚢胞	178	188	203	173	167	909 (181.8)
多発性腎嚢胞	46	37	64	57	58	262 (52.4)
593.4 尿管狭窄	12	22	26	22	23	105 (21.0)
腎動脈瘤	1	2	0	3	1	7 (1.4)
腎梗塞	3	2	0	0	1	6 (1.2)
腎性高血圧症	1	1	2	2	0	6 (1.2)

大症に対して日帰りで高温度療法を行った。

5. WHO による国際疾病分類 (I.C.D.)

I.C.D. に基づく外来新患統計

性感染症 sexually transmitted diseases (以下 STD と略す), 神経因性膀胱, 瘻孔状態などの分類は, 他科に亘っていることによる煩雑さがあり, 便宜上, 泌尿器科的に判りやすい疾病分類の項目に列べた。

(1) 感染症および寄生虫症 (Table 4)

腎結核は年平均2.4例確診されている。1980年から1987年までは, 年約10例確診しており¹⁻⁸⁾, 1993年まで, 5~6例に減少していた¹⁰⁾。このことから当院では, 腎結核は最近5年は減少傾向にあった。

STD に関しては, STD としてまとめた分類がないため, 便宜上ここでまとめた。また, 外陰部炎, 陰部湿疹も原因が明白でなく現症として診断したものである。この中にはヘルペス等によるものも一部あるものと考えている。淋菌は1992年より1994年¹⁰⁾にかけ

て, 減少していたが, 1996年より年々漸増している。

勿論クラミジア混合感染もある。ヘルペスと同様にクラミジアも最近増えている。これは診断法が明確になってきたためと考えている。

(2) ①新生物 (悪性) (Table 5)

前立腺癌が一番多かった。年平均83.4例であった。従来と比較してみると⁹⁾, 1990年までは, 30例以内であったが, 1993年より約60例, 1997年より100例に達した¹⁰⁾。次に膀胱腫瘍で, 年平均66.4例であった。腎癌は年平均19.4例であった。

全尿路性器悪性腫瘍は985例 (2.30%) であった。1986年から1993年まで⁷⁻⁹⁾は, 1.4~1.8%であった点からみると増加傾向にあった。前立腺癌と膀胱癌の増加によるものである。

(2) ②新生物 (良性) (Table 6)

尿道カルンケル, コンジローマが主たるものであった。

Table 8(2).

(1994年~1998年)

		例 数					計 (年平均例数)
		1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
592	腎および尿管結石 (合計)	(1,802)	(1,762)	(1,684)	(1,715)	(1,634)	(8,606) (1,721.2)
	腎の結石 (小計)	(632)	(593)	(574)	(588)	(579)	(2,966) (593.2)
592.2	腎結石						
	単発性						
	(両)	76	77	83	86	85	407 (81.4)
	(右)	156	146	139	152	148	741 (148.2)
	(左)	212	179	209	175	180	955 (191.0)
	多発性						
	(両)	28	36	26	19	18	127 (25.4)
	(右)	8	22	15	13	14	72 (14.4)
	(左)	23	38	31	26	12	130 (26.0)
	(経過せる)+(術後)	(32)	(76)	(64)	(67)	(37)	(276) (55.2)
	珊瑚状結石 (両)	2	13	1	0	0	16 (3.2)
	(片)	10	9	16	11	9	55 (11.0)
	(経過せる)	(10)	(15)	(13)	(14)	(7)	(59) (11.8)
	腎杯憩室結石	8	12	3	7	6	36 (7.2)
	海綿体腎結石	—	1	—	—	—	1 (0.2)
	尿管結石 (両)	4	1	—	1	—	6 (1.2)
	(片)	103	55	49	93	107	407 (81.4)
	(経過せる)+(術後)	(3)	(5)	(7)	(5)	(7)	(27) (5.4)
	UPJ 結石 (右)	0	1	1	1	—	3 (0.6)
	(左)	2	3	1	4	—	10 (2.8)
592.1	尿管の結石 (小計)	(1,170)	(1,169)	(1,110)	(1,127)	(1,064)	(5,640) (1,128)
	単発性						
	(両)	20	10	9	13	13	65 (13)
	(右)	523	516	488	488	495	2,510 (502.0)
	(左)	621	635	608	624	555	3,043 (608.6)
	(経過せる)	(44)	(95)	(90)	(76)	(79)	(384) (76.8)
	多発性						
	(両)	0	1	0	0	0	1 (0.2)
	(右)	4	6	3	2	0	15 (3.0)
	(左)	2	1	2	0	1	6 (1.2)
	尿管瘤結石	—	—	—	—	—	—
594	下部尿管の結石						
594.1	膀胱結石	31	28	20	20	28	127 (25.4)
594.2	尿道結石	6	6	6	6	7	31 (6.2)
	前立腺結石	8	11	5	3	8	45 (9.0)

Table 8(3).

(1994年～1998年)

	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
595 膀胱炎						
595.3 尿道膀胱炎	2,137	1,942	1,941	1,851	1,791	9,662 (1,932.4)
597.0 尿道炎 (女)	62	79	77	89	96	403 (80.6)
596.0 膀胱頸部硬化症	13	7	12	12	2	46 (9.2)
596.3 膀胱憩室	2	7	4	4	4	21 (4.2)
586.8 萎縮膀胱	0	1	1	1	0	3 (0.6)
(放射線性膀胱炎)	(3)	(2)	(0)	—	—	(5) (1.0)
598 尿道狭窄	74	109	155	101	96	535 (107.0)
(術後)	(33)	(17)	(6)	(2)	(0)	(58) (11.6)
尿道憩室	—	2	2	1	1	6 (1.2)
600 前立腺肥大症	958	1,104	1,129	1,221	1,353	5,765 (1,153.0)
(術後)	(119)	(125)	(145)	(111)	(130)	(630) (12.6)
601.0 前立腺炎 (急性)	14	15	18	11	20	78 (15.6)
601.1 前立腺炎 (慢性)	1,144	1,080	947	878	758	4,807 (961.4)
603 陰囊水腫	66	57	69	53	46	291 (58.2)
陰囊血腫	3	3	1	2	1	10 (2.0)
604 精巣炎	2	2	4	1	4	13 (2.6)
(耳下腺炎症)	(1)	(0)	(1)	(0)	(1)	(3) (0.6)
副精巣炎	104	89	104	104	95	496 (99.2)
(両)	(6)	(6)	(4)	(5)	(7)	(28) (5.6)
605 包 茎	136	185	177	161	138	797 (159.4)
(真性)	(7)	(8)	(13)	(11)	(15)	(54) (10.8)
嵌頓包茎	17	14	5	10	23	69 (13.8)
607 陰茎の障害						
607.0 陰茎硬結	8	—	—	6	5	19 (3.8)
607.1 亀頭包皮炎	214	247	272	254	298	1,285 (257.0)
608 男性生殖器のその他の障害						
608.1 精液瘤	3	2	3	4	5	17 (3.4)
精索水瘤	7	11	9	17	10	54 (10.8)
(456.4) 精索静脈瘤	2	2	4	3	4	15 (3.0)
608.2 精巣捻転	6	5	9	3	3	26 (5.2)
精巣垂捻転	3	1	2	3	3	12 (2.4)
重複精管	—	—	—	1	—	1 (1.2)

Table 8(4).

(1994年～1998年)

	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
608.8 精巣過敏	1	6	2	6	8	23 (4.6)
精管結紮状態	2	2	—	—	—	4 (0.8)
陰囊腫瘍	7	5	3	7	8	30 (6.0)
外陰茎部腫瘍	3	11	0	16	13	43 (8.4)
精巣萎縮	0	1	1	—	—	2 (0.4)
逆行性射精	(1)	(—)	(—)	(—)	(—)	(1) (0.2)
618 膀胱脱	5	4	1	10	9	29 (5.8)
599.5 尿道説	1	2	2	—	—	5 (1.0)
596.1 膀胱・直腸瘻	0	1	0	1	0	2 (0.4)
尿道・直腸瘻	—	—	—	—	—	—
596.2 膀胱瘻	1	2	4	2	1	10 (2.0)
997.5 腎瘻状態	2	5	3	2	0	12 (2.4)
ブリッカー状態	1	3	0	3	0	7 (1.4)
尿管皮膚瘻	3	4	2	1	1	11 (2.2)
尿道腔瘻	—	—	—	—	1	1 (0.2)

(3) 内分泌，栄養および代謝ならびに免疫障害

Klinefelter 症候群（性染色体構成は XXY を示し，以下 XXY と略す）は，5 年間 15 例経験した．この傾向は，開業当初から同様であった．

勃起障害（ED）は 364 例，年平均 72.8 例経験した．1986 年より受診数で 50 例以上急増した⁷⁾．その主なる原因は機能的，内分泌性，高齢化によるものであった（Table 7）．

(4) 泌尿生殖系の疾患

上部尿路疾患では，結石症，腎盂腎炎，腎囊胞，腎下垂が主なるものであった．結石症では，上部尿路結石は 8,606 例，年平均 1,721.2 例で，うち腎は 563.2 例，尿管は，年平均 1,128 例であった．治療の難しい，両側珊瑚状結石を 16 例，両側の腎尿管結石 16 例，両側尿管結石 65 例経験した．いずれも成功している（Table 8^{1,2)}）．1984 年 9 月 1 日より本邦ではじめて ESWL を導入した．1983 年²⁾までは上部尿路結石は，年約 333 例であったが，導入した 1984 年度 1,074 例⁵⁾と急増

した．1985 年は，1,449 例⁶⁾，その後年々微増した．

一方，下部尿路疾患では，尿道膀胱炎，前立腺炎，前立腺肥大症が主なる疾患であった．

前立腺炎は，1997 年より漸減している（健保の 2 割負担の影響か STD の啓蒙の影響か）．

その他精巣捻転と煩わしい精巣垂捻転 12 例を経験した．これはいずれも手術し，確認したものである（Table 8³⁾）．

(5) 先天異常

停留精巣，遊走精巣，不完全重複腎盂，囊胞腎が主なるものであった（Table 9）．

(6) 損傷および中毒

腎外傷 35 例はすべて保存的療法で寛解している．神経因性膀胱は 817 例経験したが，脳出血，脳梗塞，婦人科的手術後が主なる原因であった（Table 10）．

(7) 症状，徴候および診断不明確の状態

主なるものは血尿と疼痛（側腹部）である．

血尿は会社の検診，学校検診，保健所で行っている

Table 9. XIV 先天異常

(1994 年～1998 年)

		例 数					計（年平均例数）
		1994 年	1995 年	1996 年	1997 年	1998 年	
752	生殖器の先天異常						
752.5	停留精巣	19	22	12	6	15	74 (14.8)
	（経過せる）（術後）	(12) (8)	(6)	(8)	(6)	(6)	(56) (11.2)
	遊走精巣	17	16	16	11	11	71 (14.2)
	（経過せる）	(13)	—	—	(1)	(—)	(4) (0.8)
752.6	尿道下裂	1	2	1	—	—	4 (0.8)
	（経過せる）	(1)	(1)	(—)	(—)	(—)	(2) (0.4)
752.8	傍尿道口嚢腫	6	1	5	4	2	18 (3.6)
	単精巣症	—	—	1	—	1	2 (0.4)
	陰茎湾曲	—	—	1	—	—	1 (0.2)
	精管欠損症	2	—	—	—	—	2 (0.4)
753	泌尿器の先天異常						
753.0	単腎症	6	8	10	4	7	35 (7.0)
	（経過）	(5)	(0)	(—)	(—)	(—)	(5) (1.0)
753.1	囊胞腎	17	12	14	9	9	59 (11.8)
	海綿腎	3	2	2	2	2	11 (2.2)
	形成不全腎	4	—	2	2	2	10 (2.0)
753.3	廻転腎	5	7	7	2	4	25 (5.0)
	馬蹄腎	5	2	2	2	6	17 (3.4)
	骨盤腎	2	—	1	1	—	4 (0.8)
	癒合腎	1	1	—	—	—	2 (0.2)
	分葉腎	—	—	1	—	1	2 (0.2)
	重複腎盂						
	不完全重複腎盂	17	18	11	20	15	81 (16.2)
	完全重複腎盂	1	5	2	5	2	15 (3.0)
	不完全重複尿管	18	5	14	17	6	60 (12.0)
	腎杯憩室	2	5	1	3	—	11 (2.2)
753.4	尿管瘤	3	7	1	1	1	13 (2.6)
	水尿管	2	1	1	1	—	5 (1.0)
	下大静脈後尿管	1	3	2	—	—	6 (1.2)
753.8	重複尿管（不完全）	—	1	1	1	—	3 (0.6)

Table 10. XVII 損傷および中毒

(1994年～1998年)

	例 数					計 (年平均例数)	
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年		
866 腎外傷	6	4	2	4	4	20	(4.0)
(経過)	(3)	—	—	—	—	(3)	(0.6)
(疑い)	—	—	(1)	—	—	(1)	(0.2)
尿管損傷	2	3	—	—	1	6	(1.2)
膀胱損傷	1	—	—	—	1	2	(0.4)
867.0 尿道断裂 (不完全)	(1)	—	(1)	(2)	(1)	(5)	(1.0)
(完全)	(1)	—	—	—	—	(1)	(0.2)
867.6 精巣打撲	4	6	4	2	0	16	(3.2)
精巣破裂	1	2	1	2	1	7	(1.4)
陰茎損傷	8	6	1	5	6	26	(5.2)
外陰部損傷	3	8	6	10	2	29	(5.8)
尿道損傷 (留置カテーテル時)	11	4	10	6	6	37	(7.4)
膀胱タンポナーデ	—	—	—	1	—	1	(0.2)
(306) 陰茎折症	—	—	—	—	1	1	(0.2)
(344) (596) 神経因性膀胱	153	155	150	169	190	817	(1,634)
(男：女)	(60：93)	(59：96)	(54：96)	(63：106)	(65：125)	(301：516)	(60.2：103.2)
939 尿生殖路内の異物							
939.0 膀胱異物	—	1	—	1	2	4	(0.8)
尿道異物	—	—	—	—	—	0	(—)
939.2 陰茎異物	3	2	1	—	1	7	(1.2)
陰囊内異物	—	—	1	—	—	1	(0.2)

すこやか検診などによるもので、年々受診数が増加している。一部、前立腺炎、尿道膀胱炎などが含まれているものと想像されるが、不明瞭なる状態として、未診としているものである。疼痛も、外来時の IVP (DIP) にて診断不明瞭なものである。受診時には自然排石したものも若干含まれているものと考えられる

(Table 11).

以上 (1)～(7) より外来新患の主なる疾患は、膀胱炎、上部尿路結石症、前立腺肥大症、前立腺炎であり、この4主疾患を合わせると68.8%を占めた。

その他、STD、亀頭包皮灸、腎嚢胞、包茎であった (Table 12).

Table 11. XVI 症状、徴候および診断不明確の状態

(1994年～1998年)

	例 数					計 (年平均例数)	
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年		
788 泌尿系に関する症状							
788.0 腎 (腹) 部疼痛	98	119	133	150	134	634	(126.8)
788.1 排尿障害	—	—	—	1	—	1	(0.2)
788.2 尿 閉	10	6	8	9	10	43	(8.6)
788.3 尿失禁	45	56	54	54	50	259	(51.8)
788.4 頻尿および多尿	24	28	28	25	36	141	(38.5)
788.5 乏 尿	5	5	4	5	5	24	(4.8)
(浮腫)	(29)	(28)	(24)	(21)	(16)	(118)	(23.6)
(腎透析希望)	(7)	(14)	(9)	(8)	(22)	(60)	(12.0)
791 尿検査の非特異的所見							
791.0 蛋白尿	78	60	40	43	37	256	(51.2)
血尿+蛋白尿	—	—	5	2	4	11	(2.2)
(599.7) 血尿 (経過)	494	461	405	443	437	2,240	(448.0)
腎出血 (経過)	14	14	8	15	3	54	(10.8)
血尿の検査 (経過)							
791.1 乳び尿	—	1	—	—	—	1	(0.2)
780.6 発 熱	—	1	—	—	—	1	(0.2)
不妊検査	4	2	2	1	0	10	(2.0)

また, 男女別主疾患 (Table 13) については, 男子 なるもので, この3主疾患を合すると66.5%を占め
 では, 上部尿路結石症, 前立腺肥大症, 前立腺炎が主 た. その他 STD, 包皮 炎, 包茎であった. 一方女子

Table 12. まとめ (1) 外来新患の主疾患

(1994年~1998年)

	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
1 膀胱炎 (急性・慢性)	2,137 (25.2%)	1,942 (23.0%)	1,941 (23.1%)	1,851 (22.1%)	1,791 (21.6%)	9,662 (1,932.4) (23.0%)
2 上部尿路結石症	1,802 (21.3%)	1,762 (20.9%)	1,684 (20.0%)	1,715 (20.4%)	1,643 (19.8%)	8,606 (1,721.2) (20.5%)
3 前立腺肥大症	958 (11.3%)	1,104 (13.1%)	1,129 (13.4%)	1,221 (14.6%)	1,353 (16.3%)	5,765 (1,153.0) (13.7%)
4 前立腺炎 (急性・慢性)	1,153 (13.7%)	1,230 (14.0%)	965 (11.5%)	889 (10.6%)	778 (9.4%)	4,885 (997.0) (11.6%)
5 STD*	189 (2.2%)	260 (3.1%)	348 (4.1%)	404 (4.8%)	451 (5.4%)	1,652 (330.4) (3.9%)
6 亀頭包皮 炎	214 (2.5%)	247 (2.9%)	272 (3.2%)	254 (3.0%)	298 (3.6%)	1,285 (257.0) (3.0%)
7 腎嚢胞 (単・多発)	224 (2.6%)	225 (2.7%)	265 (3.1%)	230 (2.7%)	225 (2.7%)	1,171 (234.2) (2.8%)
8 包茎 (嵌頓包茎含む)	160 (1.9%)	207 (2.5%)	195 (2.3%)	182 (2.2%)	176 (2.2%)	920 (184.0) (2.2%)
9 神経因性膀胱	153 (1.8%)	155 (1.8%)	150 (1.8%)	169 (2.0%)	190 (2.1%)	817 (163.4) (1.9%)
10 副精巣炎	110 (1.3%)	95 (1.1%)	108 (1.3%)	109 (1.3%)	102 (1.2%)	524 (104.8) (1.2%)
腎盂腎炎	114 (1.3%)	87 (1.0%)	102 (1.2%)	83 (1.0%)	83 (1.0%)	469 (93.8) (1.1%)
前立腺癌	66 (0.8%)	60 (0.7%)	83 (1.0%)	103 (1.2%)	105 (1.3%)	417 (83.4) (1.0%)
水腎症	78 (0.9%)	71 (0.8%)	90 (1.1%)	86 (1.0%)	75 (1.0%)	400 (80.0) (1.0%)
勃起障害	44 (0.5%)	63 (0.7%)	90 (1.1%)	78 (1.9%)	89 (1.0%)	364 (72.8) (0.9%)
膀胱腫瘍	70 (0.8%)	69 (0.8%)	73 (0.9%)	63 (0.8%)	57 (0.7%)	332 (66.4) (0.8%)
腎下垂	73 (0.9%)	84 (1.0%)	67 (0.8%)	43 (0.5%)	52 (0.6%)	319 (63.8) (0.8%)
(有疾患数)	(8,471)	(8,434)	(8,404)	(8,385)	(8,301)	(41,995)

() %は有疾患数に対する割合：四捨五入, * 梅毒, 淋疾, クラミジア, ヘルペス, けじらみ.

Table 13. まとめ (2) 外来新患男・女の主疾患

(男)

(1994年~1998年)

主疾患	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
上部尿路結石症	1,323 (26.1%)	1,394 (27.5%)	1,284 (25.0%)	1,320 (25.1%)	1,217 (23.1%)	6,538 (1,307.6) (25.3%)
前立腺肥大症	958 (18.9%)	1,104 (21.5%)	1,129 (22.0%)	1,221 (23.2%)	1,353 (25.7%)	5,765 (1,153.0) (22.3%)
前立腺炎	1,153 (22.8%)	1,230 (24.0%)	965 (18.8%)	889 (16.9%)	778 (14.8%)	4,885 (977.0) (18.9%)
STD	189 (3.7%)	260 (5.1%)	348 (6.8%)	404 (7.7%)	451 (8.6%)	1,652 (330.4) (6.4%)
亀頭包皮 炎	214 (4.2%)	247 (4.8%)	272 (5.3%)	254 (4.8%)	298 (5.7%)	1,285 (257.0) (5.0%)
包 茎	160 (3.1%)	207 (4.0%)	195 (3.8%)	182 (3.5%)	176 (3.3%)	920 (184.0) (3.0%)
腎嚢胞	137 (2.7%)	122 (2.4%)	153 (3.0%)	129 (2.4%)	126 (2.4%)	667 (133.4) (2.6%)
副精巣炎	110 (2.1%)	95 (1.9%)	108 (2.1%)	109 (2.1%)	102 (1.9%)	524 (104.8) (2.0%)
(有疾患数)	(5,073)	(5,133)	(5,132)	(5,264)	(5,273)	(25,875)

(女)

主疾患	例 数					計 (年平均例数)
	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	
膀胱炎	1,995 (58.7%)	1,914 (58.0%)	1,905 (58.2%)	1,789 (57.3%)	1,740 (57.5%)	9,343 (1,868.6) (58.0%)
上部尿路結石症	571 (16.7%)	560 (17.0%)	574 (17.5%)	556 (17.8%)	546 (18.0%)	2,807 (561.4) (17.4%)
神経因性膀胱	93 (2.7%)	96 (2.9%)	96 (2.9%)	106 (3.4%)	125 (4.1%)	516 (103.2) (3.2%)
腎嚢胞	87 (2.5%)	103 (3.1%)	114 (3.5%)	101 (3.2%)	99 (3.3%)	504 (100.8) (3.1%)
腎盂腎炎	103 (3.0%)	77 (2.3%)	92 (2.8%)	71 (2.3%)	77 (2.5%)	420 (84.0) (2.6%)
腎下垂	77 (2.7%)	79 (2.4%)	62 (1.9%)	40 (1.3%)	46 (1.5%)	304 (60.8) (1.9%)
(有疾患数)	(3,398)	(3,301)	(3,272)	(3,121)	(3,208)	(16,120)

では、膀胱炎が58%，次に上部尿路結石症17.4%，その他、神経因性膀胱、腎嚢胞、腎下垂であった。

結 語

当院に於ける1994年より5年間の外来新来患者の統計を行った。

1年間新患総数は平均8,534.4人（8,366～8,658）であり、最近5年間の新患数は微増減の傾向であった。男女比は1.61：1である。うち紹介された患者は、平均21.0%を占めた。

新患の疾病分類は国際疾病分類に基づいた。泌尿生殖系の悪性腫瘍は年間平均197.0人（2.30%）であった。

主疾患は、男では上部尿路結石（23～27%），前立腺肥大症（19～26%），前立腺炎（18～26%）で、女では、膀胱炎（57～59%），上部尿路結石（17～18%），神経因性膀胱（3～4%）であった。

この論文の要旨を1999年5月15日（土）第344回日本泌尿器科学会北海道地方会にて発表した。

また、本臨床統計作成にあたり、当院事務局の諸士の多大なる支援を頂きました。心より深謝申し上げます。

文 献

1) 丹田 均，加藤修爾，大西茂樹，ほか：東札幌三樹会病院における臨床統計（第1報），1983年度外来新患統計。泌尿紀要 **30**：1671-1676，1984
2) 加藤修爾，丹田 均，大西茂樹，ほか：東札幌三

樹会病院における臨床統計（第2報），開設より5カ年余の外来新患統計。泌尿紀要 **30**：1677-1684，1984
3) 丹田 均，加藤修爾，大西茂樹，ほか：東札幌三樹会病院における臨床統計（第3報），1984年度外来新患統計。泌尿紀要 **31**：1743-1749，1985
4) 坂 丈敏，丹田 均，加藤修爾，ほか：東札幌三樹会病院における臨床統計（第4報），開設より5カ年余の入院および手術統計。泌尿紀要 **31**：1751-1759，1985
5) 丹田 均，加藤修爾，大西茂樹，ほか：東札幌三樹会病院における臨床統計（第5報），1984年度入院患者統計。泌尿紀要 **31**：1995-2002，1985
6) 丹田 均，加藤修爾，大西茂樹，ほか：東札幌三樹会病院における臨床統計（第6報），1985年度外来新患統計。泌尿紀要 **33**：730-734，1987
7) 丹田 均，加藤修爾，大西茂樹，ほか：三樹会病院における臨床統計（第7報），1986年度外来新患統計。泌尿紀要 **33**：1662-1668，1987
8) 丹田 均，加藤修爾，大西茂樹，ほか：三樹会病院における臨床統計（第8報），1987年度外来新患統計。泌尿紀要 **34**：2213-2218，1988
9) 丹田 均，加藤修爾，大西茂樹，ほか：三樹会病院における臨床統計（第9報），1988年度外来新患統計。泌尿紀要 **35**：1445-1450，1989
10) 丹田 均，加藤修爾，大西茂樹，ほか：三樹会病院における臨床統計（第10報），最近5年間の外来新患統計（1989-1993年度），泌尿紀要 **41**：313-322，1995

(Received on April 26, 1999)
(Accepted on September 18, 1999)